

「イエスの栄光」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 17：1～5

<導 入>

大阪や東京などに出されていた緊急事態宣言は、6月20日まで延長されることになりました。この戦いはいつ収束するのかが見えず、時間の経過とともに社会構造は変革しつつあります。飲食業は壊滅的な打撃を受け、企業の収益も大きく変動しています。事業計画も見直しを余儀なくされ、働き方もテレワークなどの在宅勤務が取り入れられるようになりました。国の借金も莫大なものとなり、後世に負の遺産を残すこととなります。その遺産を回復させることはほとんど不可能に近いものなのでしょう。コロナウイルスの感染は一時的で、すぐに元に戻ると思われていました。私も初めはそのように考えていましたが、その考え方は改めなくてはならないと思っています。

それとともに、教会のあり方や信仰生活も変わり、今までのような教会活動や信仰生活を求めるのではなく、新しい考え方や形態を考えていかなければならないとも思っています。教会での礼拝を厳守するようには、もはや言えなくなりました。オンライン礼拝が主流となり、たとえ感染が収まってもオンライン礼拝と集会の礼拝をどのように持つかは、新しい課題です。礼拝メッセージもいろいろな形で聞くことができ、教会に対する所属意識が薄れ、自分勝手な信仰生活や、聖書から逸脱した教えに惑わされる危険性も高まっています。教会での交わりや励まし合いも、人との接触ができない中でどのように持つのかも考えなくてはなりません。また伝道方法も、今までのように多くの人々を大会場に集めて行うことはできなくなり、新しい宣教方法を見出していかなくてはなりません。

そのような中で、私は先日のアルゼンチン宣教ニュースレターから教えられました。在原先生が担当しておられるモンテカルロ教会が、コロナウイルスの感染拡大の中にあっても、量的に成長しているというニュースです。午前9時の礼拝には30名、午後19時の礼拝は60名で、成長率は80%です。その要因は、70代後半の一老女・ドーラ姉妹の存在と彼女の不屈の祈りだということです。彼女の提案で始まった「定例祈禱会」は参加者が増し加えられ、それが今日の教会成長につながったと思いますと書かれてありました。また毎朝5時半開始の『早天祈禱会』は、ずっと長い間ドーラ姉妹が単身で続けられました。この祈りこそ、霊的覚醒の一大要因だと思いますともありました。さらに、19世紀の大覚醒運動(リバイバル)は、アメリカのボストン郊外で、7名の青年による「枯草山の祈禱会」が発端だそうです。その祈禱会が始まる前に、一老人がそこで祈り続けていました。ドーラ姉妹の祈り、あの「枯草山祈禱会」の前に祈った一人の老人の祈りがあったことを忘れてはならないと思います。先日私たちの教会が、ささげものをさせて頂いたことに対する感謝のメールには、次のように書かれてありました。「アルゼンチンの感染率はずいぶんブラジルを抜いてトップになってしまいました。二万人未満の田舎町モンテカルロでも感染による死亡者が30名を突破している状態です。たまりかねた州政府はロックダウンを発動し、感染防止に必死のようです。ここは『現状を信仰によって受け止め、信仰によって乗り越えよう』という日々を送っています。勝利への基本方策は、やはり『祈り』です」。今後の信仰生活や教会生活の新しいあり方を追い求める上で、どうしても祈りが必要です。イエスは、弟子たちと最後の晩さんを済ませた後、弟子たちを励ますために御言葉を語られ、最後に弟子たちのために祈られました。今日は、ヨハネ福音書17章からイエスの祈りを見ていきましょう。

I. 十字架の栄光

▽イエスの最後の祈りは17章全体にわたって記されていますが、大きく三つに分けられます。1～5節は、イエスご自身のための祈り、6～19節は、弟子たちのための祈り、20～26節は、すべての信仰者や教会のための祈りです。イエスご自身のための祈りから見ていきましょう。イエスは自分自身のために祈られました。神様がイエスご自身にしてほしいことを祈られました。私たちも自分自身のために祈りましょう。誘惑に負けることがないように、自分と合わない人を愛することができますように、この難しい問題に解決の道が開かれますように、自分の進むべき道が示されますようにと、何でも父なる神様に祈ることができます。祈って、それらを神様に委ねましょう。自分の思いや願い通りにならなくても、神様に祈りましょう。

▽ヨハネ17：1 「これらのことを話してから」とは、イエスが最後の晩さんで語られたすべてのことです。それは十字架にかかって死なれ、この世を去られること、それから聖霊が送られることを中心にした弟子たちへのメッセージです。それから「目を天に向けて言われた」とは、祈られたということです。イエスは十字架にかかれる直前に、ご自分の生涯を祈りで閉じられました。イエスの地上の生涯には、十字架の苦難と死が待っていることを知っておられました。その上でイエスはその地上の現実から、目を天に向けて祈られました。祈りは、この地上の現実から目を離して、天を見上げることです。今、日本では、主にコロナ、ワクチン、オリンピックの情報があふれています。その情報の内、どれが自分にとって必要なのか、取捨選択に迷っています。しかしクリスチャンには、目をこの地上のことから離して、天を仰いで祈る特権が与えられています。

イエスは「父よ」と呼びかけて、祈り始めました。私たちも「天の父なる神様」と告白して、祈り始めるならばこの地上の様々な出来事から目を移すことができます。私たちの信じている神様は「父なる神様」であり、そのお方に祈れることがどんなに幸いであるかと思えます。以前、ボルヨソン先生が「主の祈り」の中で「天にいます私たちの父よ」と祈れることが、どんな大きな特権であるかを語ってくださいました。私はそのことをよく覚えています。私たちが、イエスと同じように神様のことを「父なる神様」と呼べるのが、どんなに大きな特権かと思えます。「あなたがたが子であるので、神は『アバ、父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました」とガラテヤ人への手紙にありますように（ガラテヤ4：6）私たちが神様に向かって「父よ」と祈ることができるのは、聖霊の働きです。そのように叫ぶのは、私たちが神様の子どもだからです。

▽イエスはこう祈られました。「父よ、時が来ました」。この「時」とは、まさしく十字架の時です。この「時」は、人が罪を犯して神様から離れてから、十字架によって神様のもとに帰る道が開かれる時です。人類が待ち焦がれていた時です。この時のために、イエスは5節「世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光」を捨てて、人の姿をとってこの地上に来てくださいました。十字架によって、その栄光に戻る道が開かれました。十字架は、人類の歴史にとって最も大切な時です。なぜなら、十字架がなければ、人は神様のもとに帰ることができないからです。

「子があなたの栄光を現わすために、子の栄光を現わしてください」。イエスは、ここで何を願っておられるのでしょうか。イエスは十字架の杯を取り除けてくださいというのではなく、十字架によって神様の栄光を現わすために、あなたの子イエスの栄光を現わしてくださいと祈られました。私たちは、苦難や迫害に遭っても、人から責められても、それらから逃げるのではなく、その中でイエスの栄光を現わしてくださいと祈りたいものです。私たちの栄光を求めるのではなく、神様の栄光を求めたいものです。それでは、イエスが求められた栄光とはどのようなものでしょうか。

ヨハネ17：24「世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわた

しに下さった栄光」とあります。イエスが願われた栄光は、父なる神様の愛の中にありました。イエスは、ただ父の愛をお求めになりました。私たちは、父なる神様に愛されることを求め、その愛を体験したいと願います。神様は、すべての人を愛しておられます。しかし、神様の愛を個人的に体験することが、神様の栄光を見ることになります。

ある方の体験です。その方はクリスチャンで、長い間病気を患っていました。若い時から病気がちで、働くこともできず、何のために生きてきたのかわからなくなると、寂しくなると言っておられました。また一人暮らしのわびしさもあったようです。ある牧師先生は、その人に何を言っても慰めにはならないと思われ、人間だれしも寂しいものではないですかとしか話すことができなかつたそうです。その後、その牧師先生がその人を訪問したところ、その人が「先生、昨夜一晩寝られなかつたのです。よく考えてみたらイエス様がそこにいらっしゃるのに、私はそれに気づいていなかったのです。そのことがわかつた途端、本当にうれしくなってきました」と話されたそうです。その牧師先生は「自分に頼るものがなくなつても、イエス様がともにいてくださることに気づき、そのイエス様を送ってくださった神様の愛に気づくことが、私たちの信仰です。この経験は、暗闇から明るい世界に180度転換させる大きな力を持っています」と言っておられます。

II. 永遠のいのち

▽ヨハネ17：2、3 イエスは、「すべての人を支配する権威」が、ご自分にあることを告白されました。その権威とは、十字架によってすべての人の罪を赦し、新しい人生を与える恵みです。その新しい人生には「永遠のいのち」が与えられます。それでは、「永遠のいのち」とは、どのようないのちなのでしょう。永遠に続くいのちのことでしょうか。「永遠」という言葉の原語には、いのちの長さという概念はほとんどありません。永遠という言葉があてはまるお方は、神様しかおられません。永遠のいのちとは、神様のいのち以外何ものでもありません。永遠のいのちを持つとは、神様の愛、神様の平和、神様の喜び、神様の聖さを体験することを意味します。そして、永遠のいのちとは、3節「唯一まことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知る」ことにあります。旧約聖書に「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもつて、カインを産んだ」（創世記4：1）とあります。夫と妻の関係は、性的関係以上のものです。二人の心と精神との親しい交わりを指します。神様を知るとは、単に神様について知的な知識を得るだけではなく、神様との親しい人格関係を持つことです。神様を信頼して持つ親しい交わりを言います。神様との親しい関係は、イエスなしには不可能です。神様を知るとは、神様がどのようなお方であるかを知ることであり、神様との親しい交わりに入ることです。そして、神様との親しい交わりは、具体的行動や生き方に現われます。それで、私たちはイエスを愛し、イエスの言葉に従い、イエスについていきます。そのような中であつて、私たちは喜びと感謝と賛美の生活に導かれます。この世において、この交わりに生きることはクリスチャンの特権であり、永遠のいのちに預かる人生です。私たちのクリスチャン生活の祝福の源は、神様との親しい交わりです。神様との親しい交わりは、祈りによります。祈りは、クリスチャン生活の祝福の源であり、いのちです。ここの「知る」という言葉は、原語では継続を現わします。つまり、祈れば祈るほど、祝福は増し加わります。オズワルド・チェンバースは、次のように言っています。「祈りの要点は、あなたがたがよりよく神を知ることである。祈りは、私たちにとってのいのちである。だから、祈りを妨げるものに注意せよ。『絶えず祈りなさい』とあるように、つねに心の中で神に祈る習慣を保て」。口に出して祈ることは祝福ですが、心の中で神様を意識し、祈ることも祝福です。一人で祈ることも祝福ですが、夫婦や家族や教会で一緒に祈ることも祝福です。時間を決めて祈ることも祝福ですが、いつも心の中で祈ることも祝福です。詩篇37：4 「主を自らの喜び」とし、神様に祈る日々を過ごしたいと思ひます。神様は、私たちの祈りを喜んでくださいます。